

親鸞仏教センター通信

2011.
September

2011年9月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

第38号

先の見えない世界から

親鸞仏教センター研究員 春 近 敬

東日本大震災から半年が過ぎようとしている。マグニチュード9.0という未曾有の巨大地震によってもたらされた津波は、東日本の太平洋沿岸部を壊滅させた。町や村が丸ごと津波にさらわれて、想像を絶する数の方々がお亡くなりになり、また未だ行方不明となっている。加えて、同時に引き起こされた福島第一原子力発電所の事故は深刻な事態が続いており、周辺の相当の範囲の住民が、強制的に自分の家から遠ざけられている。ここまでの「いま」の私が見聞きし、茫然とたたずみ、無力感に打ちのめされている事実である。

実は、今回この文章を書いている「いま」の私は、まだ夏を迎えていない。このような出版物は多くの方々の仕事を経て出来上がっているのも、元原稿は出版よりも少し前に書かれることになる。正直に申し上げれば、この文章が皆さまのお目にかかるころには、この国が一体どのような姿になっているのか、いまの私には皆目見当がつかないのである。行方不明の方々が少しでも見つかったか。避難所にいらっしゃる方々がどのような生活を続けられているか。再度の津波をともしなう大規模な余震が来ていないか。被災地の復興はわずかでも進んだか。原子力発電所の事故処理や放射性物質の拡散といった問題はどのような収束の途をたどっているのか。電力不足が言われるなか、エアコンの使用を前提とした建築が多いところで暑い夏を無事に乗り切れているのか。

考えてみれば、このような「予見」というものは、もとよりつかない世界だったはずなのである。生死無常、老少不定の理^{ことわり}は仏教が問いかける根本課題の一つである。しかし、私たちは都合の悪い「予見」を斥け、「予見」のつかないことを恐れる。明日も、1ヶ月後も、1年後も、今日とまったく同じ世界が続いているであろうという目算によって、私たちは社会のシステムを成り立たせている。いま、改めて当たり前であったはずの事実気づかされ、大きく揺さぶられているのである。

かつて、20世紀の終わりが近づいてきたころ、「未来へ手紙を書く」ということが流行した。将来の自分や家族に手紙をしたためて保管し、多くは21世紀を迎えたときに開くというものがあった。いまの私は、数ヶ月先の未来の自分と皆さまに向けて手紙を書いているような心持ちである。どうか、これ以上の悲しみや苦しみが少しでも増えませんように。この震災にであったすべての皆さまが、少しでも安らげる状況に近づくことができますように。そのように、自らに都合の良い「予見」を願わずにはいられない、「いま」の自分がいるのである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑩

「悲しきかな、愚禿鸞」

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第40回～42回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第40回、41回では「第十八願（続）」について、第42回では、「第十九願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、その第40回から一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■「悲しきかな、愚禿鸞」という表白

親鸞は、「信の一念」ということを押さえ直して、「『一念』は、これ信樂開発の時剋の極促を顕」すと（『真宗聖典』239頁、東本願寺出版部、〈以下、『聖典』と略記〉）。時剋の極めてはよい時、時だけれども時を截っている。時間のなかにあって時間を破るような時間。そういうものが一念の信だと。つまり、時間をかけて段々にどうにかなっていくという発想を截るわけです。少しでもよくしていこうという発想をすばと截って、「横超断四流」（『聖典』243頁）、本願力のはたらきがわれわれの存在を横ざまに截って、迷いの命を断ずる。つまり、ある意味でそこに死ぬという意味があるのだと。これは、曾我量深先生は、善導大師の「前念命終後念即生」という言葉を手がかりにして、「本願を信受するは、前念命終なり」（『聖典』430頁）という『愚禿鈔』の言葉をヒントにして、信に死すると。信ずるということは死ぬことだと。本当に本願を信ずると決断することとは、完全な受身。ということとは、自力

の思いに死ぬということなのです。自力はもう役に立たんということを徹底的に知らされる。

そこに「にもかかわらず」という問題が残ってくる。「悲しきかな、愚禿鸞」（『聖典』251頁）という有名な表白がそこで出てくるわけです。回向の信心ですから、根拠が如来のはたらきにある。如来のはたらきにおいて、われわれは不実であり、本当に信ずることなどできない身であり、そして本当に願生するなどということがない身であると。『歎異抄』第九条にあるように、やはり少しでも長生きをしたい、正直なところあまり浄土に往きたくありませんと唯円が言う。それでこそ凡夫なのだ、当然だと親鸞聖人は受けるわけです。そんな心ではだめだ、しっかり願生せよ、そのようには言わない。「仏かねてしるしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば」（『聖典』629頁）と。もうわかっているのだと。それは、生死の凡夫ですから、生死の凡夫を直していこうという発想を完全に止めて、もうそのまま凡夫であることを認める。となると、そこに「悲しきかな、愚禿鸞」ということが出てくるわけです。

「悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず」、「愛欲の広海」、これは、煩惱具足の生活空間です。「名利の太山」、人間関係のなかで少しでも人からほめられたい、少しでも利益を得たい。そういうのが凡夫の本質である。全面的におまかせすると言いながら、煩惱がある。ということは後から後から自力の心が湧いてくる。嫌な心が起こってきたと気がつけば、止めておこうと思いますから、それは、自

力の心ですね。「定聚の数に入ることを喜ばず」。信心を得るということは、如来回向の信心なのだから、正定聚だよ、必ず大涅槃をいただけるのだと。でも、そういくら言っていたいても嬉しくない。これは信心がないのではなくて、如来のはたらきとして信ずるのだけれども、自力が消えない。そういう構造が信心なのです。他力の信心になったら自力根性が完全になくなって、もう人間でなくなるわけではない。人間なのです。愚かな凡夫なのです。

■「難治の機」

「悲しきかな、愚禿鸞」と、こういう言葉を置いて、そして、救いがたい衆生の代表として愚禿鸞ということを見据えながら、「難治の機」(『聖典』251頁)、難治の三病、治療しがたい存在として、五逆、謗法、それから一闍提という三つの言葉が『涅槃経』ではテーマになっていると。こういうことを出してこられる。

阿闍世が父親を殺して王位を篡奪し、父親を殺したことによって、もがき苦しんで、そしてお釈迦さまの言葉でたすかっていくという、『涅槃経』で語られているその展開を、親鸞聖人は随分とていねいに読み込んで、順序を変えたりしながら引用しておられる。

『教行信証』『信巻』の坂東本の表紙に、親鸞が書いたメモがある。そのメモは、「信巻」にある『涅槃経』からの引文で、阿闍世、あなたは王様になるのに自分の親を殺したけれど、そのようなことは歴史のなかにいくらでもある。その人たちはみんな地獄に行ったわけではないから安心しろと。そういうことを言っている段がある。その部分をどういうわけか「信巻」の表紙にメモのごとくに書いているのです。坂東本以外ではこのメモはない。だからちょっと謎なのですけど、でも、ここだけメモしているということには、何か意味があるのではないか。

自分の生きているということには、必ず他を排除したり、他を踏み台にしたり、あるいは他を食べたり、他の命を殺したりしてきて、それ

で今、自分が成り立っているということがあ。自覚するしないに関わらない。深層の宿業のなかにそういうものがずっとある。例えば、私は今、寺の住職をしていますけれど、以前は父親が住職をしており、私が四十を過ぎたころに、親父がくたびれた、くたびれたと言って、寺の仕事をしたくなくなってきた。それなら譲ればいいのに、譲らない。そうすると、なんだ、この親父は、いい加減に譲ればいいのにかね。さすがに殺そうとまでは思わないけれど、やはりそういう心は起こるわけです。そういうことはどんな関係でもないとは言えない。ただ、人間はそういう存在であるという罪に気づく存在である。もし気づかないなら、本願力の救いを本当に憑むということにはならない。

親鸞聖人において、たすからない存在、本当に治療しがたい存在の代表は阿闍世である。しかし、その阿闍世の物語は単なる他人事ではない。阿闍世のそういう物語が自己の問題として、切実な問題として感じられるという素質が親鸞にはあるわけです。だから親鸞という人はドストエフスキーの立場であったら、小説を書けるような素質だったと思うのです。何か、そういう人間の深い傷を痛まずにおれない。また痛むからこそ、本当にその傷から治癒されることを要求するのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は下記のとおり公開(無料)で開催しています。

記

日時：2011年 9月 休 会
10月3日(月)午後6時30分～9時
11月1日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記(京都・東本願寺出版部)まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

現代と親鸞の研究会・第38回

激変する社会のなかでいのちを考える

—人生の苦難のなかで今を生きる—

上智大学グリーンケア研究所所長 高木 慶子



高木慶子 氏

2011年6月7日、東京国際フォーラムにおいて、上智大学グリーンケア研究所所長、上智大学特任教授である高木慶子氏をお迎えして「現代と親鸞の研究会」を開催した。氏は二十数年来、ターミナル（終末期）にあたる人々のスピリチュアルケア、また愛する人や大切なものを失くし、苦悩する人々を支えるグリーン（悲嘆）ケアを続け、阪神大震災やJR宝塚線（福知山線）脱線事故の遺族らにも寄り添われている。

今回は「激変する社会のなかでいのちを考える—人生の苦難のなかで今を生きる—」をテーマに掲げた。今年の3月11日に起きた東日本大震災でも多くの方が亡くなられ、さらに財産や仕事など大切なものを失われた人々が大勢いる。そのような状況の今、いのちとは何か、悲嘆に寄り添うとはどういうことなのかを考え、深めていくことは非常に重要なことだと思う。ここではその一部を紹介する。

（嘱託研究員 大谷一郎）

■ ルターと親鸞

私は、カトリックのなかから出られたルターと親鸞が非常に似ているように思えるのです。これはあくまでも私が思うのであって、これからの私の研究テーマだと思っています。私の理解のさわりだけ申しますと、親鸞聖人には、恩師というのでしょうか、先生というのでしょうか、法然上人がいらっしゃった。一方で、ルターが先生と仰いだ方は聖パウロです。コリント人への、ローマ人への、あるいはガラテヤ

人への手紙など、いろいろな信徒への手紙をお書きになった方で、『新約聖書』で欠かすことのできない存在です。その聖パウロをルターはご自分の最も大事な先生となさった。

その聖パウロと法然上人はよく似ていらっしゃると思うのです。掟をきちんと守り、そしてご自分の信じていることをきちんと弟子に伝え、生活も素晴らしい。文字どおり「聖人」の道をお歩きになった。それに対して親鸞聖人はご自分の人間としての弱さ、罪深さ、欲の深さをよくおわかりになり、それと同じようにルターもご自分の人間としての弱さ、欲の深さというものに気が付き、それでどういうふうにして自分たちは救われるのか、そのことに悩み抜いて行きついたのが、「信じる」ということだったのだと思います。そこがお二人の共通点のように私は思います。

自分自身をわかればわかるほど、人間の欲深さというものに気づくと思うのです。人間自身を理解しようとすればそれは即、自分自身を知ることです。人間を知りたいと思えば自分自身を知らなければなりません。こんなに欲の深い存在でも阿弥陀如来さまは、おおいなる方は自分を救ってくださるのか、自分のような人間に仏さまはご慈悲を向けてくださるのか、そういう大きなテーマにぶつかってくると思います。そういう課題にぶつかった親鸞聖人は、覚りというのでしょうか、こういう弱さのなかで苦しんでいる私を仏さまは救ってくださるのだと。私はそこに非常に惹かれるのです。ルターもそうでした。

私はカトリックですが、親鸞聖人のその姿にも、ルターのその姿にも非常に惹かれますのは、人間の欲深さを知るだけでは足りない。欲

深さに苦しむ。苦しんで、自分のこういう弱さ、欲深さをおおいなる方はどうしてくれるのだろう。そこに苦しんだとき、はじめて救いの手が伸びてくる。その苦しみの意味。そこがお二人の共通点ではないかと思います。

■「心のケア」「グリーフケア」

「心のケア」ということを考えてみますと、大震災後に必要な「心のケア」は、災害によって、重複する喪失体験をした後に残る複雑な悲嘆をケアすることだと思います。つまり、その「悲嘆の状態にある人々のケア」をすることを日本では普通「心のケア」と呼んでおりますが、具体的には「悲嘆ケア」すなわち「グリーフケア」なのです。

これをあえて皆さま方に強調いたしますのは、今、宗教家と言われる、特に仏教の皆さま方にとっては、グリーフケアこそがお仕事の大半を占めているのではないかと思うからです。

通常の生活のなかでの悲嘆は、家族のひとりや二人を亡くすだけでも深い、強い悲嘆に陥ります。それが、災害後の悲嘆は本人にとって大切と思うものをすべて一瞬にして喪失し、明日を生きる希望さえ失ってしまう恐ろしい喪失体験になります。

私は、今回、仙台の避難所でお会いした方々を通して、一瞬にして自分にとって大事なものを喪失し、明日を生きる希望をもなくしてしまった恐ろしい体験をした方々に寄り添うケアを提供することが、やはり大切であると思いました。そして、特に宗教家と言われる私たちは限らない思いやりと、相手に対する尊敬と信頼をもって接することが何よりも大切なことだと思います。そのために必要なのは、言うまでもないことなのですが人生観、死生観、そして自分の宗教観をもっているかということです。それをはっきりともっていないと宗教家としてのケアが非常に難しくなると思います。悲嘆というのは大事な方を亡くしたり、あるいは大事なものを失くした後、例えばリストラや会社の倒産などの後にも起こります。その自分が生き

ていていいのかと、生きることに苛^{さいな}まれていく方々に対して、私たちが声を掛け、相手の話を伺^{うかが}うためには、私たちの人生観、死生観、宗教観がきちんと自分なりに確保されていないならば非常に難しい結果になるのではないかと私自身の体験から思っております。

どの宗教、宗派に限らず、生と死の概念とその意味をわかり、それを信じているものには、悲嘆にある人々のグリーフケアに協力することが可能であり、またそのことはなすべき慈愛の勤めでもあらうと思います。大事なものを失い、生きるすべのない方々になすべき慈愛の勤めがあるとするならば、それは宗教家にとって最も大事なお勤めではないかと思っております。

(文責：親鸞仏教センター)

※高木慶子氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第24号(2012年6月1日号)に掲載予定です。

高木慶子(たかき よしこ)上智大学グリーフケア研究所所長

熊本県に生まれる。聖心女子大学文学部心理学科卒業。上智大学神学部修士課程修了。博士(宗教文化)。現在、上智大学グリーフケア研究所所長・上智大学特任教授。「生と死を考える会全国協議会」会長、「兵庫・生と死を考える会」会長。二十数年来、ターミナルにあたる人々の「スピリチュアルケア」、並びに愛する人の死に直面した人々を支える「グリーフケア」を続け、その一方、学校教育現場で使用できる「生と死の教育」カリキュラムとビデオを製作されている。著書に『大切な人をなくすということ』(PHP研究所)『喪失体験と悲嘆—阪神淡路大震災で子どもと死別した34人の母親の言葉』(医学書院)、『死と向きあう瞬間—ターミナル・ケアの現場から』(学習研究社)、『大震災—生かされたいのち』(春秋社)など多数。



「現代と親鸞の研究会」(於：東京国際フォーラム)

願を信樂するがゆえに、この信心すなわち仏性なり。仏性すなわち法性なり。法性すなわち法身なり。法身は、いろもなし、かたちもまします。しかれば、ころもおよばれず。ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらわして、方便法身ともうす御すがたをしめして、法蔵比丘となりのたまいて、不可思議の大誓願をおこして、あらわれたまう御かたちをば、世親菩薩は、尽十方無碍光如来となげけたてまつりたまえり。この如来を報身ともうす。誓願の業因にむくいたまえるゆえに、報身如来ともうすなり。報ともうすは、たねにむくいたるなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五五三―五五四頁)

語 註

「一切群生海」例えば、『教行信証』には次のように記されている。
 「一切の群生海、無始よりこのた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諸偽にして真実の心なし。」(『真宗聖典』二二五頁)
 「しかるに無始より已来、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信樂なし。法爾として真実の信樂なし。」(『同』二二七―二二八頁)
 「しかるに微塵界の有情、煩惱海に流転し、生死海に漂没して、真実の回向心なし。清浄の回向心なし。このゆえに如来、一切苦惱の群生海を矜哀して、…」(『同』二二三頁)

試訳をめぐる

〔原文〕この如来、微塵世界にみちみちたまえり。すなわち、一切群生海の心なり。この心に誓願を信樂するがゆえに、この信心すなわち仏性なり。

〔現代語訳〕この如来は、いついかなる所にも、今ここにも、余すところなく満ち満ちている。つまり、如来は煩惱にまみれて苦惱する一切衆生の心である。生きとし生けるものをたすけんとして立ち上がってくるのが如来の誓願なのだから、この苦惱の心にそれを疑いなく深く信じ悦べば、この信心こそが仏性なのである。

う。「涅槃」を滅度という、無為という、安樂という、常樂という、実相という、法身という、法性という、真如という、一如という、仏性という。仏性は、すなわち如来である。この如来は、いついかなる所にも、今ここにも、余すところなく満ち満ちている。つまり、如来は煩惱にまみれて苦惱する一切衆生の心である。生きとし生けるものをたすけんとして立ち上がってくるのが如来の誓願なのだから、この苦惱の心にそれを疑いなく深く信じ悦べば、この信心こそが仏性なのである。仏性とは、法性である。法性は法身である。法身は、色もなく形もない。だから、我われの思慮分別も及ばず、言葉で言い表すこともできない。この一如という、色も形もない真理そのものから(かたち)を現して、方便法身といわれるお姿を示し、法蔵比丘と名のられて、人智では到底はかれない大誓願をおこされた。その現れてくださったお姿を、世親菩薩は尽十方無碍光如来と名づけられたのである。この如来を報身と呼ぶ。誓願の因に報えて(かたち)となつたのだから、報身如来と呼ぶのである。報というのは、因に報えるということなのである。

微塵世界に満ち満ちている「如来」。それが「すなわち、一切群生海の心である」とは一体どういふことなのか。それは取りも直さず、「一切衆生悉有仏性」ということがどこで言えるのかという、大乘仏教の問題でもある。

語註を参考にすれば、「一切群生海の心」自身は煩惱海に他ならない。どこまでいっても「たすかない衆生の心」、それが人間の分限である。

しかし、どれだけ苦惱の、煩惱の生活をしていようと、そこを「場所」として如来が用いられてくる。どうにも救い難いところをもって、如来が立ち上がってくるのである。そのためには心が本願を信ずるという、つまり回向の信心を通して如来が用いられるのである。すなわち、私の中に起る心であるけれども、それが如来回向の信心だからこそ「一切衆生悉有仏性」という事実がここにある、と親鸞は言うのである。

煩惱の心に本願の用らき信すれば、その煩惱の心が、本願の用らる場所になる。この重層的構造をいかに表現していくのか、議論が重ねられた。(訳・語註：親鸞仏教センター)

4・8	親鸞聖人ご命日のついで
4・13	第11回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会
4・15	第59回「唯信鈔文意」研究会
4・21	第16回清沢満之研究会 宗派とオックスフォード大学出版局との間で、鈴木大拙訳「英訳教行信証」の出版契約が締結される。
5・2	第60回「唯信鈔文意」研究会
5・6	第12回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会
5・10	第42回「通算・第93回」連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
5・13	親鸞聖人ご命日のついで 第16回清沢満之研究会
6・7	第38回現代と親鸞の研究會「激変する社会のなかでいのちを考える―人生の苦悩のなかで今を生きる―」上智大学グリーフケア研究所所長高木慶子氏(千代田区・東京国際フォーラム)
6・8	第42回研究検討會議(研究・交流・出版等の企画)以降、定期的に會議を開催。 第1回「尊号真像銘文」研究会 親鸞聖人ご命日のついで
6・10	第12回英訳「教行信証」研究会
6・13	第18回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会
6・22	第13回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会
6・24	第17回清沢満之研究会
6・30	第43回「通算・第94回」連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム) 第5回親鸞仏教センター研究交流サロン「世代連綿とアイデンティティ・ジェネレーション」ナルサイクルの中で「京都大学教授…西平直氏、大正大学教授…弓山達世氏(千代田区・東京国際フォーラム)
7・1	人事発令(本曾修事務長が大谷祖廟事務所に発令、金石助成事務長が発令、前田専学客員研究員、中津功非常勤職が再任) 親鸞聖人ご命日のついで 第129回英訳「教行信証」研究会 第2回「尊号真像銘文」研究会 第14回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会 第44回「通算・第95回」連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム) 第108回清沢満之研究会 第20回英訳「教行信証」再版編集會議 人事発令(越部良一、法隆誠幸が嘱託研究員として再任)
7・7	7・12
7・19	7・26
7・27	8・1

『聖典』の試訳（現代語化）

「無明のまどい。この試訳を検討する中で、「迷う」と「惑う」の語義に話が及んだ。「迷う」とは、行くべき道に迷うというように、どうすべきかの判断がつかない状態を表した言葉である。「あれか」「これか」「それとも」、幾つもの選択肢を前にわれわれは迷う。

これに対し「惑う」とは、まったくおもむきの異なる言葉のようだ。辞書の一節には、行動の伴った困惑した心理状態、とある。つまり、あれこれと試みたことすべてが私の思惑に外れ、どうしてよいかわからない。そこに「惑い」があるのだろう。それゆえ、「迷う」よりずっと根源的であり、散々失敗してきたものの心境が「惑い」と言えるかもしれない。

「行に迷い信に惑い」、親鸞は主著『教行信証』の序文（「聖典」一四九頁）にこう記している。もはや万策尽き存在自体が所在無くなつて…という、苦悩する姿がそこに垣間見えるようだ。しかし、この苦悩する心こそ如来の用らく場所が見いだされてくる。

『唯信鈔文意』試訳 ⑭

原文

「極楽無為涅槃界 随縁雑善恐難生 故使如来選要法
教念弥陀專復専」（法事讃）。「極楽無為涅槃界」というのは、「極楽」ともうすは、かの安楽浄土なり。よろずのたのしみつねにして、くるしみまじわらざるなり。かのくにをば安養といえり。曇鸞和尚は、ほめたまつて安養ともうすところのたまえり。また「論」には、「蓮華藏世界」ともいえり。無為ともいえり。「涅槃界」というのは、無明のまどいをひるがえして、無上涅槃のさとりをひらくなり。「界」は、さかいという。さとりをひろくさかいなり。大涅槃ともうすに、その名無量なり。くわしくもうすにあたわず。おろ、その名をあらわすべし。「涅槃」をば、滅度という。無為という、安楽という、常楽という、実相という、法身という、法性という、真如という、一如という、仏性という。仏性すなわち如来なり。この如来、微塵世界にみちみちたまえり。すなわち、「一切群生海の心なり。この心に暫

現代語訳

「極楽無為涅槃界 随縁雑善恐難生 故使如来選要法 教念弥陀專復専」（法事讃）。「極楽無為涅槃界」という言葉の意味は次の通りである。「極楽」というのは、阿弥陀如来の安楽浄土のことである。あらゆる楽しみが常に満ちていて、苦しみも少しもまざらない。その世界を安養というのである。心が安らぎ、身が養われるからである。だからこそ、曇鸞大師は「讃め称えて安養という」とおっしゃったのである。「浄土論」では「蓮華藏世界」ともいわれている。また、極楽は無為ともいわれている。「涅槃界」というのは、根本無明の惑いを翻して、この上ない涅槃の境地を開くことである。「界」とは境であり、この上ない境地を開く境界である。大涅槃を表す言葉には数限りがない。したがって、つぶさに言うことはできないが、幾つかその名を挙げてみよう。

親鸞仏教センターの動き

(2011・257) 抄出

■2011年

2・1 人事発令（マーク・L・プラム客員研究員が再任）

第40回（通算・第91回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

第125回英訳「教行信証」研究会

第33回鈴木大拙訳「教行信証」の考究

2・3 親鸞聖人ご命日のつどい

2・4 第6回研究員と読む公開読書会「近代日本と仏教―『精神界』を読む―①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿」

2・7 第102回清沢満之研究会「清沢満之と宗教言説―修養と自足性―大谷大学教授・加米雄之氏（文京区・東京ガーデンバレー）

2・14 第57回「唯信鈔文意」研究会

2・18 第102回清沢満之研究会「清沢満之と宗教言説―修養と自足性―大谷大学教授・加米雄之氏（文京区・東京ガーデンバレー）

2・22 第4回親鸞仏教センター研究交流サロン「いま（いのち）に向き合うということ―メタバイン・オエシックスの視点から―」（山梨大学大学院教授・香川知品氏、大谷大学教授・池上哲司氏（豊島区・池袋ステーションコンファレンス）

2・25 第9回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会

3・1 第103回清沢満之研究会

3・1 「『聖』第21号、「現代と親鸞」第22号、「親鸞仏教センター通信」第37号を発行。

3・3 第58回「唯信鈔文意」研究会

3・4 第40回鈴木大拙訳「教行信証」の考究

3・8 第126回英訳「教行信証」研究会

3・9 第104回清沢満之研究会

3・11 第41回（通算・第92回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

3・15 親鸞聖人ご命日のつどい

3・31 第10回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会

4・1 春近敬研究員に大正大学から博士号が授与される。論題「近代の仏陀観に関する一研究―二〇世紀初頭のドイツと日本を中心として―」

山本伸裕嘱託研究員に大谷大学から博士号が授与される。論題「『精神主義』は誰の思想か―清沢満之と浩々洞の人々―」

人事発令（内記沈研究員、常務顧問研究員が発令、田村晃徳、大谷一郎、山本伸裕が嘱託研究員として再任）

●『教行信証』真仏土・化身土巻研究会報告②●

大乘『涅槃經』の思想と『教行信証』

親鸞仏教センター研究員 花園 一実

『教行信証』『真仏土巻』は、その半分に近い分量が『涅槃經』の引用文によって構成されている。ゆえに、この巻を親鸞の思想にかなったものとして読み解いていくためには、『涅槃經』のもっている課題性を、その歴史的背景も含めて了解していくということが必要不可欠である。このような問題意識のもと、研究活動の一環として、2010年12月24日、東京ガーデンパレス（文京区）において、大谷大学教授の織田顕祐先生をお迎えして、「大乘『涅槃經』の思想と『教行信証』」という講題でお話をいただいた。織田先生は、主に中国仏教を専門にされており、2010年度の真宗大谷派安居では『涅槃經』をテキストに次講を務められている。研究会では、『涅槃經』の成立と構造、一闡提と仏性の関係性などについてお話いただいた。ここにその一部を紹介する。

■『涅槃經』の成立と構造

『涅槃經』には、人間としての釈尊の最後を記録した阿含經典の『涅槃經』と、釈尊が亡くなられるという場面を借りて、そもそも仏というものは本質的に生滅するものではない、ということ説いた大乘『涅槃經』の二つの系統がある。その大乘の『涅槃經』について、今私たちが『涅槃經』と呼んでいるものには三つある。まず、法頭の訳した六巻の『泥洹經』。これは最も古くに漢訳されたもので、その後の『涅槃經』のコアにあたる。次に南北朝の時代、北の地において曇無讖によって翻訳された四十巻の北本『涅槃經』。そして、その後南朝において『泥洹經』と北本『涅槃經』を照合し、整理する形で作られた、三十六巻の南本『涅槃經』がある。親鸞はこの中で、南本と北本を『教行信証』において引用されている。

『涅槃經』は曇無讖によって、どうやら三回



織田顕祐（おだ あきひろ） 大谷大学文学部教授

1954年愛知県生まれ、1977年大谷大学文学部仏教学科卒業、1979年大谷大学大学院文学研究科修士課程修了、1984年大谷大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。2007年大谷大学文学部教授。専門は東アジア仏教思想史研究、中国日本華嚴教学研究、漢訳大乘經典研究。

著書に『初期華嚴思想史』（韓国、仏教時代社）、『ブッダと親鸞一教に生きる』（共著、東本願寺出版部）、『浄土論註講義十』（奥羽教区教学研究室）、『大般涅槃經序説』（東本願寺出版部）など。

に分けて翻訳されていると考えられる。翻訳の度に經典が成長し、言葉が増え、思想が深まっていった形跡が見受けられるからである。前半十巻を初分、中盤の十巻を中分、そして最後の二十巻を後分と、分けて考えてみると、『涅槃經』という經典は理解しやすい。前半で提起された問題が、中盤でまた展開し、そして後半でさらにまた展開するという、三重構造になっているからである。それまで『維摩經』『般若經』などの初期大乘經典によって提起されてきた、法身・摩訶般若・解脱という三つの課題が、大般涅槃の内容として重なり合い、螺旋状にグルグルと巡るように問題が展開していく。『涅槃經』とは、このような構造をもった經典なのである。

■仏性とは何か

大乘仏教における如来という存在は、「如来常住無有變易」と言われるように、本質的に移

り変わるものではなく、永遠の法身と呼べるものである。この法身における不生不滅の永遠性を『涅槃經』では「如来性」と呼ぶ。三重構造をもつ『涅槃經』の前半部分では、この如来性という問題が中心に取り上げられており、やがてその概念は、經典における思想の深まりに伴い、「仏性」という言葉へと展開していくのである。

「一切衆生に悉く仏性あり（一切衆生悉有仏性）」という仏性の問題、これは例えば「オタマジャクシはなぜカエルになるのか」という話で説明することができる。オタマジャクシとカエルは、一見すると別々のようである。しかしオタマジャクシは、カエルになるという一貫した性質をもっているものであり、オタマジャクシが犬や猫になるということはある得ない。一見、まったく別のもののように思えるが、しかし本当に別なものであったらそうはなれないという関係がある。同じではないが別でもない、この関係を「不二」といい、またそこに貫いている、決して変わらない性質を「性」と呼ぶのである。そして仏教の智慧の立場から眺められる時、衆生と仏の関係においても、この一貫した変わらない性質というものが見えてくる。そこに「オタマジャクシにおいてカエルを見る」ということが成り立ってくるのであり、それが衆生において仏性を見るということなのである。

■ 一闡提と仏性

しかし、このような一貫性、つまり「常住」なるものを認めていく思想は、『涅槃經』が説かれる以前の立場、つまり仏教は無常・無我を説く教えであり、変わらないものは何一つないと考える伝統教学の立場からは、到底認めることのできない説であった。ゆえに『涅槃經』において初めて説かれた、如来や涅槃が「常楽我淨」であるとする大乘仏教の思想は、本来の仏の教えに背くものであるという反論が、当然のように出てくるのである。そのように「如来常住」「衆生仏性」などの、大乘の思想を否定する立場のことを、『涅槃經』では「一闡提」と定義していた。これが一番始めの一闡提の意味である。

やがて、この問題が三重構造をもった『涅槃經』という經典の中で展開し、深められていくことで、「善友に近づかない」「因果を見ない」

など、一闡提の定義も細分化されていくこととなる。そして、後半の「徳王品」になると、「なぜ一闡提は仏性を見ることができないのか」という、「仏性を見ない」という問題へと展開し、一闡提を巡って同時に仏性の問題も深められていくのである。そしてこの展開の中で、一闡提の者が仏性を見ることができない原因として、それは菩提心を発す因縁を欠いているからだと言われてくる。ここに、一般的に一闡提のものとして解釈される、「断善根」「信不具足」などの意味が生まれてくるのである。断善根などの単語を聞くと、仏に成る因縁が完全に断たれてしまっていて、二度と生じてこないというニュアンスを受けてしまう。しかし、そもそも仏性が有るか無いか、生ずるか生じないかという問題は、本質的に一闡提と関係がない。一闡提の問題とは、もともと「悉有仏性」と如来が言われている、その真理を見ようとし、しないことに全て起因しているからである。仏性は無為法であり、因縁に関係なく常に真理として有り続ける。それを見るか、見ないかというところに一闡提という問題の本質があるのである。

『涅槃經』におけるこの仏性と一闡提のように、思想というものには必ず生まれるべき必然性がある。私たちはこの必然性としての思想背景をよく理解せずに、先入観によって本来の意味を曲げて了解してしまっていることが、多々あるのではないだろうか。今回の研究会を通して感じたのは「でどころ」に触れることの大切さである。そして親鸞が「真仏土」として私たちに示そうとされていることも、私たちの先入観を離れた、この「でどころ」としての真実報土の世界なのである。

※織田顕祐氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第23号（2011年12月1日号）に掲載予定です。



『教行信証』真仏土・化身土巻研究会（於：東京ガーデンパレス）

● 清沢満之研究会報告 ⑪ ●

清沢満之と宗教言説

—修養と自足性—

親鸞仏教センター研究員 春 近 敬

2011年2月18日、東京ガーデンパレス（文京区）において、大谷大学教授の加来雄之氏をお招きして「清沢満之研究会」を開催した。「清沢満之と宗教言説—修養と自足性—」という講題でお話をいただいた後、研究員を交えて活発な議論が交わされた。ここでは、その一部を紹介する。



■ 清沢満之における宗教言説

近代日本の宗教言説の世俗化、すなわち宗教言説が世俗関心に侵食されていくなかで、清沢満之は教義や学説を超えた宗教言説を主体的に問い直し、実験し、提唱しました。そのような問い直しを、清沢は社会的に限定された理論的関心ではなく、宗教を自らの生の依り処としていくにあたっての普遍的な課題として営んでいました。

清沢は、宗教を一貫して有限と無限の関係のなかで考察しました。無限とは有限の外にある何かではなく、無数の有限の総体です。その有限の総体である無限を「万物一体の真理」と呼び、その真理に基づく正念の本体を「阿弥陀仏」と呼ぶのです。つまり、阿弥陀は私たちの他者ではなく、私たちの心霊にとっての無限の境遇なのです。その無限の境遇に達する自覚こそ宗教の真髄であり、道德の源泉だといわれます。この考え方を言説という問題に当てはめれば、次のようになります。まず、生のあり方を有限に関わらせる言説を世俗言説といいます。例えば倫理は有限と有限の関係を表すので世俗言説です。対して、生のあり方を無限に関わら



加来雄之（かく たけし） 大谷大学文学部教授
1978年大谷大学文学部仏教学科卒業、1984年同大学院文学研究科博士課程（真宗学）修了。2009年より大谷大学文学部教授。
著書に、『ブッダと親鸞』（共著・東本願寺出版部）、論文に「『文類』といういとなみ—親鸞における宗教言説の伝承」（『親鸞教学』92号）、「已に僧に非ず俗に非ず」（同90号）、「清沢満之と多田鼎の宗教言説観」（同85号）、「清沢満之における宗教言説の問い直し」（同82・83号）、「無量寿経の伝統における「願生」の探求—「浄土真宗における祈り」を考察するための基礎的作業」（『日本仏教会年報』70号）、「歎異抄」における「オホセ」—第十章を手がかりとして」（『大谷学報』82巻1号）など多数。

せる言説が宗教言説です。無限を生きようとする人間の生を方向付けるような言説です。そして、有限から無限に志向する宗教言説が聖道門であり、無限から有限に向かってくる、つまり無限が有限のかたちをとって関わってくるような宗教言説が他力門だということです。

■ 宗教言説の自足性

「自足性」とは、安田理深の言葉です。「名号はある意味で表現性という意味をもつ。本願を表現している。ことばの有用性は道具の意味といえるが、表現という意味をあらわすために、有用性に対して『自足性』という言葉をつくった。何かのためにあるものではない、自身のためにあるもの、この意味で自足性という。」

(安田『言の教学』第六講、取意)ということである。仏教が表す「如」、今ここにこうしてある、これ以外に我が身が還る場所はないという厳然たる事実を立て、そこに還らせる言葉が自足性を実現できるのだと思います。これを清沢にたずねれば、『御進講覚書』の「人心の至奥より出づる至盛の要求の為に宗教あるなり。宗教を求むべし、宗教は求むる所なし」という言葉にみることができます。存在論的要求を呼び起こし、それに応えるものが宗教言説なのです。

そして、清沢の宗教言説はどこまでもみずからの心霊上の経験を厳密に語るという態度に貫かれていました。清沢は、自分の心に観ぜられた部分を根本とし、「心霊上の事実」として宗教を語ります。それ以外のものとして宗教を語るのではないということを強調しています。この「心霊上の事実」を語るというところに清沢の宗教言説における根本態度があるのではないのでしょうか。

■ 宗教言説と修養

清沢において修養とは「心霊の修養」、つまり心霊を修養するのであって、いわゆる修身道徳的なものではありません。『当用日記』(明治36年)の巻末に次のようにあります。「我等の大迷は如来を知らざるにあり。如来を知れば始めて我等の分限あることを知る。乃ち我等の如意なるものと、如意ならざるものとあるはこの分限内のものと分限外のものとあるが為也。(中略)我等が賦与せられたる種々の能力を適当に運用し進めば如来は我等の分限を増大ならしめ玉ふ也。是れ我等が我等の能力を精練修養せざる可からざる所以也」。我々が修養するのは、如来から与えられた分限を増大するためだという視点です。

この修養は「求施原則」、求められたら持っていたら与えなさい、足りないものは持っている人からもらいなさいという原則によって為されます。これには補足条件があります。一つは、求めて得られないときはその時が来ないといと受け止めること。もう一つは、あらゆる持ち物は如来の持ち物であって自分の所有ではな

いと受け止めることです。この原則のもと修養していくときに、大きな力となるのが宗教言説です。清沢の修養とは「日常止観」です。私たちが日々、如来の絶対的な眼差しを忘れずに生きていくことです。

それでは、どうすれば忘れずに生きていけるのか。清沢は、私たちよりも先に歩み、課題を担い、それを超えていったさまざまな先人の言葉を非常に大切にしました。自らが帰依する宗教的伝統のみでなく、さまざまな伝統の方々の言葉に出遇っています。自らの迷悶を単に個人的なものとは見ずに、むしろ人類の深く長い迷いの歴史のなかで受け止めようとしたと言えるのではないのでしょうか。どの時代の方の言葉であっても、どの宗教の言葉であっても、私たちに訴えかけ呼び覚ましてくるような、そういう宗教的要求に応じてくるような宗教言説に学ぶという姿勢が、清沢の修養の大きな傾向であったのではないかと思います。

ですから、精神主義とは決して仏教の特定の思想運動ではなく、むしろ宗教をどのように受け止めていくのかという、宗教言説に対する態度についての主義です。そして、言葉を受け止める際にそれがどのような意味をもつのかということを明確にしないと、宗義と宗学の区別がつかなくなったり、あるいは自分の宗派の優越性の主張に終始したりします。実は、そのことが現在の宗教言説が置かれている危機的状況なのではないかと思います。

※加来雄之氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第23号(2011年12月)に掲載予定です。



「清沢満之研究会」(於：東京ガーデンパレス)

第 4 回「親鸞仏教センター研究交流サロン」を開催（2月22日）

親鸞仏教センターでは、さまざまな分野の有識者との交流が、当センターと有識者間だけに留まらず、有識者相互間の研究交流へと展開し、そこから新たな視座を得ることを目指し、「親鸞仏教センター研究交流サロン」を開催している。その第4回目を、さる2月22日池袋ステーションコンファレンス（東京都豊島区）を会場に開催した。

今回は、「いま（いのち）に向き合うこと—メタバイオエシックスの視点から—」をテーマに、山梨大学大学院教授の香川知晶氏から発題をいただき（写真・右）、大谷大学教授の池上哲司氏（写真・左）からコメントをいただいた後、約30名の参加者の間で意見交換がなされた。

香川氏の発題では、まず、「バイオエシックス」（生命倫理）という分野の起源と現状に触れ、「現状のバイオエシックスの第一の関心は、医療・生命科学の政策立案であり、応用倫理というよりも応用法学の意味合いが強くなっている。そのことにより、当初バイオエシックスにあった、「人間についてのより広い見方」が、その展開の過程で失われてきているのではないか。例えば、臓器移植法は、人々にある種の思考停止をもたらしたのではないか。それにより、臓器移植における「日本の遅れ」の論点が、科学的に遅れているということではなく、提供臓器が少ないということ、さらには、倫理・道徳・奉仕の精神が遅れているということに直接移行してしまった。つまり、議論の中心が「脳死は人の死か」から「臓器移植をいかに増やすか」ということにすり替わってしまった。そこで、今一度、議論を活性化させ「人間についてのより広い見方」を回復させていくことが、メタバイオエシックスの役割である」と述べられた。

続いて、池上氏からは討議の糸口として「メタバイオエシックスの具体的なかつ最終的な依りどころは何か、それを明示していくことによって、この考え方が新しい人間観の創造を喚起し、救済ということにつながっていくのではないか」などの提言をいただき、参加者とともに、個々の「生死」についての考え方や、人体が資源化され、医療の問題が政治や産業の問題にすり替わっていくことの問題など、活発な意見交換がなされた。

※講演記録は、『現代と親鸞』第23号（2011年12月1日号・1冊1,200円）に掲載の予定です。



●東北地方太平洋沖地震によって被災された皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。

現在、真宗大谷派ではお見舞いの救援金を募っております。

救援金口座を開設しておりますので、皆さまの温かいご支援を何卒お願い申し上げます。

【本山（宗務所）窓口】

郵便振替口座番号01030-4-2244 加入者 真宗大谷派宗務所財務部（救援金）

※振替用紙の通信欄に「東北地方太平洋沖地震災害救援金」と明記くださるようお願いいたします。

出版物のご案内

◇『親鸞に学ぶ信心と救い』法蔵館

当センター所長の本多弘之の広島での講演録です。親鸞思想の真髓がわかりやすく書かれています。

お問い合わせは法蔵館まで TEL075-343-0458



◇『共存の生産原理—欲生心の僧伽—』

真宗大谷派東京教務所

当センター所長の本多弘之が宗派の学位「嗣講」を授与された折に、東京教区によって開催された授与記念講演会及び祝賀会での講演録です。

お問い合わせは東京教務所（真宗会館）まで

TEL03-5393-0810



◇『「精神主義」は誰の思想か』

当センターの山本伸裕嘱託研究員が長年論考を重ねてきた課題の一つの集大成。従来、清沢満之のものとされてきた晩年のテキストを、弟子たちの回想文や清沢の書簡などの二次資料をもとに分析し、清沢晩年の思想的精華といわれてきた「精神主義」の本質に迫っています。

お問い合わせは法蔵館まで TEL075-343-0458



◇『曾我量深講義録』上・下巻

春秋社から真宗大谷派西弘寺の伊東慧明住職と元当センター研究員の伊東恵深氏の編集による、曾我量深氏が最晩年大谷大学長を務めていたころに、同大学院での2年間の講義を収録したもので、未発表の講義録です。

上巻は「教行信証大綱」、下巻は「真宗大綱」と題して構成されており、曾我氏の晩年の思索が親鸞思想を学ぶ者にも読みやすいように編集されています。

お問い合わせは春秋社まで TEL03-3255-9611



●センター新スタッフの紹介

事務長 金 石 励 成

研究員 内 記 洸

1982年岐阜県生まれ。京都大学大学院文学研究科修士課程（宗教学）修了。元当センター嘱託研究員。

嘱託研究員 常 塚 聡

1973年石川県生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学（宗教学）。元当センター研究員。

あ と が き

さる7月にセンタースタッフの人事異動があった。7月といえはセンターが開設されて10年。これまでのセンターの活動にご尽力、ご協力いただいたすべての方々に改めて感謝申し上げたい。重ねて、長谷岡元事務長並びに木曾前事務長のセンターに対する篤い思いに敬意を表したい。▼11年目の歩みについて、センターの設立の願いを再確認しつつ、一つひとつの活動を進めてまいりたいと存じます。引き続き、皆さまのご支援をお願いいたします。おかげさまで自身の基に開信を置き、その先に開法の方がうまれてくるような日々を営んでいくことが、死に行くまでの私の“生活”であるとうまくはかりとしてきた。隣の人に南無阿弥陀仏と声をかけてみる。日々の煩悩のただなかで、そのことに少し生きがいを感じつつ、真宗大学の東京退学100年を偲う。（大江）▼望むものも望まないものも、自分の思いをまったく無視して成り立つのが縁。嬉しい縁も、忌々しい縁も、自分を超越、自分の身に起こることをすべて大切にしてきた言葉が「ご縁」という言葉のように感じる。頭ではわかっている。でもその「ご縁」すべてに納得できない私がいる。（鈴木）